

のう こう 農耕とかんがい③

— わら 加工 と 製品 —

稲作にともなって得られるワラは、日本人のくらしに欠かすことの出来ない重要なものであった。燃料や肥料、家畜の飼料として用いられたり、生活用具の素材として広く利用され、農作業はもちろん生活のあらゆる面でワラが使用された。夜なべ仕事として、また雨の日や農閑期の仕事としてワラジやゾウリ、コモやムシロ、ミノなどを作り、生活に必要なものは自分たちで賄った。

● 槌

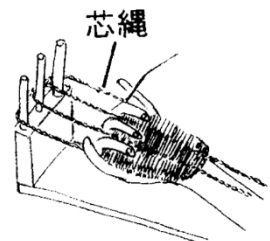
ワラを加工しやすくするため、ワラ打ち石の上にワラをのせ、これでたたいた。

● 押切

ワラを適当な長さに切るのに用いた。切ったワラは牛や馬のえさなどにした。

● 草履台

草履を編むときに用いた。芯縄を突起にかけて固定し、ワラを編みこみながら指で押さえ込んで、草履を作った。



● 縄ない機

縄を編む機械。均質の縄を大量に編むことができた。

● ムシロはたご

ムシロ（ワラ製の敷物）を織る道具。明治時代のもので、たて縄をはり、横にワラを通して織り上げた。

● コモげた

コモを編む道具。2つで一組となったツツロを交互にわたし、横に通したワラを編んでいく。これによってタワラ、ビク、ミノなどが作られた。

● ビク

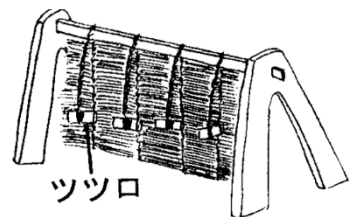
畑で収穫したものを運んだり、弁当を入れたりした。

● ミノ

雨降りの日に着用した。ワラ製やシュロ製のものがある。

● オオネゴモ

暑中の日除けにしたもので、田や畑で作業するとき、背中に背負った。



コモげた

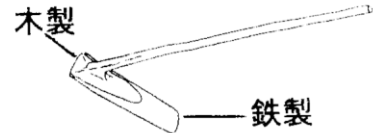
のう こう 農耕とかんがい④

— のう こう しよ どう ぐ 農耕諸道具 —

稲は古来より最も重要な農産物であり、米は日本人の主食であった。江戸時代の農民は米を作って、年貢として納めなければならなかった。

稲作や畑作に使う道具は作業内容によってさまざまであり、農民は永い年月をかけて土質や自分達に適した、使いやすくして便利な道具を作り出してきた。こうした工夫や改良を重ねてきた道具の一つ一つに、先人達の足跡をうかがい知ることができる。

- 風呂鍬…田を耕す道具。木製の風呂と呼ばれる部分と鉄製の刃からなっている。



- 備中鍬…田を耕したり、開墾するときに使った。刃の本数が3本のものと4本のものがある。また、柄の長いものは、腰を曲げずに立ったままで畑の固い所を掘り起こすことができたために、タチオコシともいった。

- 株切…乾田で株と根を切り離すのに使った。株切りをしておくくと田を耕すときに株のついた土の塊を破壊しやすかった。

- 床締槌…水が漏れないよう、田の床をたたき、固くしめた。

- 代掻…田植え前の田に水を満たし、土のかたまりを砕いてならした道具。

- 田すり…水田の除草に使用した。手作業やがんづめによる作業に比べ楽で効率もよかった。取った草は田の肥料となった。

- 田おこし…放射状に配列された爪を回転させ、水田の草を取った。

- 窓鍬…稲作の終わった水田を裏作用の畑にし、畝を作るときに使用した。

- 金鍬…刃が薄くて軽い。また、小振りのため扱いやすい。田畑を耕したり、畝を作ったりするときなどに使用した。

- 土入…冬に麦を作るとき、麦の芽の上で土をかぶせるのに用いた。土をかぶせ麦踏みをするると強い麦ができた。

- 玉葱用筋付…畝に筋をつける道具。その筋にそって玉葱の苗を植えた。

- 粃干…粃を乾かすため、ムシロの上に広げるのに用いた。

- 麦たたき…穂先だけにした麦をムシロに広げ、麦の芒をとってきれいにした。

